

ルポライター北村年子さんと高校生

子どもや若者によるホームレスの人たちの襲撃事件を取材し、中学や高校などで人権尊重プログラムの授業をしているルポライターの北村年子さん(四)が一日、弱いじめの問題をテーマに名古屋市内で講演し

た。高校生スタッフ五人が北村さんの話を聞き、「弱者が自分より弱い人に暴力を向けている現実と、加害者の心の奥にある「悲しみ」について考えた。

(社会部・砂本紅年)

ホームレスを考える

北村さんは二十八歳のとき日雇い労働者の町、大阪・金ヶ崎に行き、半年間、子どもたちと野宿者支援を続けた。

野宿の人たちのほとんどは日雇い労働者。「ドヤ」と呼ばれる簡易宿泊所で寝起きし、SKKの仕事を携わるが、年をとる若い人に仕事をとられる。働きなくなると切り捨てられ、野宿生活になってしまった。

「おっちゃんは怠けていいのではないか。いつも『仕事がほしい』『働きたい』と言つていた」と北村さん。夜回りをする地元の子どもたちが「おっちゃんのが悪いんだ違う。おっちゃんをさうさせてる世の中が悪いんだ」という姿が印象に残ったという。

当時、北村さんは神戸の高校で起きた校門圧死事件にショックを受けていた。遅刻を取り締まる教諭が校門を閉めた時、女子生徒が門にはさまれて死した。人間味や温かさのない学校や教員、そんな学校に対する怒りの感情を奪われ

た。高校生スタッフ五人が北村さんの話を聞き、「弱者が自分より弱い人に暴力を向けている現実と、加害者の心の奥にある「悲しみ」について考えた。

(社会部・砂本紅年)

「ホームレス」という言葉は、野宿生活を経て路上生活者という「人」を指す言葉ではなく、安心できる居場所や家がない「状態」を指す言葉だ。北村さんは言つ。ホームレスは自己責任の問題とされ

がちだが、戦争での難民や自然災害による難民もホームレス。「立派な家に住んでいても心が安らげないホームレスの状態にある子どもも増えている」

そして、そんな若者がホームレスの人を襲撃する事件が起きた。九五年、大阪市で女性の高校生スタッフ5人が感想

鈴木まり子(三重・津高三年)取材が終わり、「一人吊りの電車に乗った。高校生スタッフ五人が北村さんと話をしていました。北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。いつの間にか涙が出てきて、そ

んな自分に困惑った。「強くなてもいい」「つらいって言つてもいい」。ありのままの姿を肯定してくれる北村さんとの言葉に優しく包み込まれた。

栗本将太(名古屋高三年)、「いやめはやる側も悪いが、やられる側にも問題があると思っていた。だが、いじめは」と言つた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛ける側に理不尽なのではなく、その人に合った支援が必要だ。

朝見留奈(愛知・瑞陵高3年)私は北村さんと話をしていました。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

歩く姿勢で、生きるために必死で生きている。でも、北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

歩く姿勢で、生きるために必死で生きている。でも、北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

歩く姿勢で、生きるために必死で生きている。でも、北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

裏う子

自尊感情が欠けている

ホームレスの男性が、無職の若者によって道頓堀川に落とされ、亡くなった。弱い者が、弱い者を襲つた。北村さんはこの事件の加害者と被害者を対応に取り組む地元の子どもたちが「おっちゃんのが悪いんだ違う。おっちゃんをさうさせてる世の中が悪いんだ」という姿が印象に残ったといふ。

「おっちゃんが悪いんだ違う。おっちゃんをさうさせてる世の中が悪いんだ」といふ

じめの加害者は、「自分の大切なことについて考

えました。でも、そのなりに心へ

の悲しみ。自分に価値がある

て

いる。

「ホームレスを裏う子やいじめの加害者は、みんな自尊

情とは、持つて生まれた命をあるがまま受け入れて尊重する気持

たい、認めてもらいたいと思つても、そうならないことへ

の悲しみ。自分に価値がある

て



北村年子さん(下)に質問をぶつける高校生スタッフ=名古屋市中区で



北村年子さん
（下）

高校生スタッフ5人が感想

鈴木まり子(三重・津高三年)取材が終わり、「一人吊りの電車に乗った。高校生スタッフ5人が北村さんと話をしていました。北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

歩く姿勢で、生きるために必死で生きている。でも、北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

歩く姿勢で、生きるために必死で生きている。でも、北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと

歩く姿勢で、生きるために必死で生きている。でも、北村さんは学校や家庭で傷つけられた。私は、野宿者の人々を「ホームレス」「たまバト」というボランティアがあつた。ひどくしてやがて別は、常に仕掛けられた。自分自身を守るために必死で生きている。でも、北村さんはよく「今どきの若者は」とひと